

「天命に安んじて人事を尽くす」
—清沢満之の求道における根本課題としての自己と他者—
加来雄之（大谷大学）

*清沢の文については読みやすさを考え、清濁点、句読点などを補った。

はじめに

I 他力門宗教の根本課題—無限と有限との「根本の撞着」

(1) 清沢満之と真宗の学び—曾我量深の受け止め

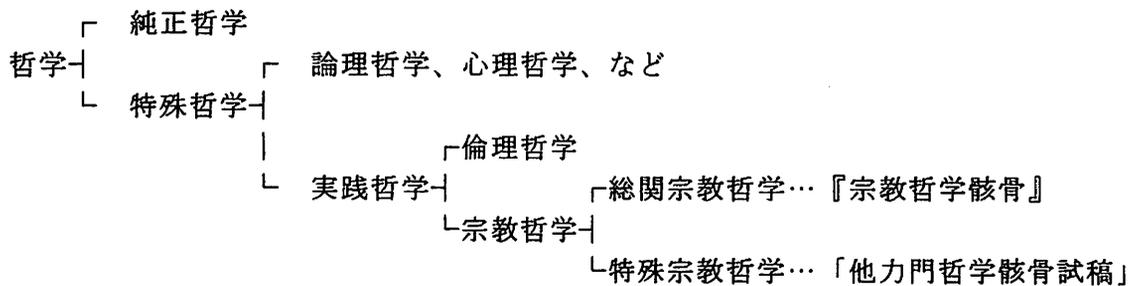
①「清沢師が教へられたる大方針は云何 師は何等の結論を与へられなかった 唯第一歩の方針を与へられた 第一はその研究の根本なることである 何等の教権と臆説や仮定とを離れて直に大道の攻究に向ふことである」(曾我量深「明治44年ノート」より。『宗教の死活問題』後記)

②「清沢満之先生の一代の努力といふものは、畢竟ずるに道德といふものと宗教といふものの違ひを明らかにするといふことに尽きてをつたやうであります。」(『曾我量深講義集』第四卷一四四頁～一四五頁)

(2) 清沢満之の生涯における学の課題

①他力門宗教の基礎づけ—「哲学骸骨」という課題

清沢は、当時の世間がいづく宗教に対する誤解や批判(たとえば福沢諭吉の「宗教は茶のごとし」という見解に代表される功利的宗教観、また井上哲次郎の『教育ト宗教トノ衝突』(明治二十六年)によって端緒を開かれた宗教と道德の関係についての論争)に対するため、宗教を理性(知)や道德(善悪)と区別し、宗教が人間にとって有する独自の役割を明らかにすることにつとめた。



②「他力門哲学骸骨試稿」

〔一〕宗教

『宗教哲学骸骨』における宗教の定義からの展開が注目される。「有限と無限の一致」—「安心立命」—「抜苦与楽」—「故に安心立命の大楽を欲するものは、有限の範囲を去りて無限の境遇を求め、之に対して精神の適合を求めざる可からざるなり」(「他力門哲学骸骨試稿」『全集』二・四三頁)

〔二〕無限

「凡そ吾人精神作用の境遇となるべき一切の点に於て無限なるもの之を略称して無限の境遇(或は単に無限)と云ひたるなり。…中略…故に宗教上精神の対境となるべきもの之を称して悲智円満の尊体と云ふ。阿弥陀仏とは之に対する梵語なり(阿弥陀仏とは無量寿光覚者と云ふ意也 無量寿とは慈悲円満の表号にして無量光とは智恵円満の表号なり 又仏とは最尊の称号なり)」(「他力門哲学骸骨試稿」『全集』二・四四頁)

〔三〕有限無限

有限と無限は異格の関係—「今、有限無限は之に異なり、乃ち無限は其のみにて全体を成し、有限は其部分を成すに過ぎざるなり。他語以て之を云はば、通常甲非甲は二者同等の資格を有すと雖ども、有限無限の場合に在りては無限は有限と其資格を異にするを見る。即ち無限は有限の上位に在るものなり。」（二・四五頁）

「〔四〕根本の撞着……而して其第一着に現前するは根本の撞着なり。何をか根本の撞着と云ふ。多一の撞着可分不可分の撞着等是なり。先づ多一の撞着とは一は多にあらず。多は一にあらず。而して一は多ならざるを得ず。多は一ならざるを得ず。即ち有限は多数なり無限は唯一なり。而して有限無限同一なりと云ふ。是れ一即多多即一なりと云ふものにあらずや……否啻此等に止まらざるなり。有限無限は同一体なりと云ふが、抑、根本の撞着なり。絶対相対、自立依立に就て云ふも亦然り」（「他力門哲学骸骨試稿」『全集』二・四六～四七頁）

〔五〕有限の外に無限あり

「無限を基想として」「今転じて有限を基想とせば」「故に無限有限其体同一たると同時に有限の外に無限の存在することを知らさるべからざるなり」（「他力門哲学骸骨試稿」『全集』二・四七頁）

〔六〕自他力二門

「而して有限無限其体一なりと信するものは現前有限の吾人にも其内部に無限の性能ありとなすか故に自力を奮励して此潜在的無限能を開展せんとす 是れ自力門の宗教なり 然るに有限の外に無限ありと信するものは在外の無限に無限の妙用を認るか故に此無限の妙用に帰順して其光沢に投浴せんとす 是れ他力門の宗教なり」（「他力門哲学骸骨試稿」『全集』二・四八頁）

…中略…

〔二五〕自力他力

「故に他力門の信者より云はしめば自ら無限性なきのみならず一切の有限に無限性あることなすと断言するなり 何の躊躇か之れ有らん」（二・六七～六八頁）

有限無限の場合に在りては、無限は有限と其資格を異にするを見る。即ち無限は有限の上位に在るものなり。」（「他力門哲学骸骨試稿」『全集』二・頁）

〔三三〕伴属莊嚴

「然るに独り伴属莊嚴に至りては是れ无限界の特象にして有限界に見る能はさる所のものなり……所謂教化の本源、救済の大目的たる迷界の万靈こそ正に此伴属莊嚴の出处たるなれ 伴属莊嚴の因果大に考究せざる可からざるなり

伴属莊嚴——利他心——迷界心靈」（「他力門哲学骸骨試稿」『全集』二・八四頁）

〔四五〕信後風光

「獲信の得益甚た多緒なりと雖ども、一括して之を云ふときは宗教の目的を遂成して信者の心底一大安喜の発現するにありと云ふ可し……」

然れども信心決定の行者必しも忽ち全く仏陀と化し常に浄土に住するにあらず。……他力教門の信者其信心実金剛の堅を持すと雖ども、若し夫れ煩惱紛起して邪念強盛の時にありては或は外道悪魔に近似することなすと云ふ能はざるなり……」

（3）「いえども」の自覚—「根本の撞着」の受け止め方

浄土（無限のはたらき）と穢土（有限）という二つの世界を生きるものとして

①「いえども」の自覚—「にもかかわらず」という存在への勇気

②「如来内存在」「非本来的本来的、本来的非本来的」（安田理深）

II 清沢満之の「自己とは何ぞや」

(1) 「自己とは何ぞや」についての誤解

① 「自己とは何ぞや」という問いは自分探しではない。一タマネギの譬喩

「一五八 先ず自分を正しくととのえ、次いで他人を教えよ」「一六〇 自己こそ自分の主である。他人がどうして(自分の)主であろうか? 自己をよくととのえたならば、得難き主を得る。」「一六六 たとい他人にとっていかに大事であろうとも、(自分ではない)他人の目的のために自分のつとめをすて去ってはならぬ。自分の目的を熟知して、自分のつとめに専念せよ」(『真理のこゝろ』第一二章「自己」、岩波文庫三二・三三頁)

(2) 清沢満之における「自己」

① 「自己トハ何ソヤ 是レ人世ノ根本的問題ナリ」(『臚扇記』)

② 「吾人の世に在るや、必ず一の完全なる立脚地なかるべからず。若し之なくして、世に処し、事を為さむとするは、恰も浮雲の上に立ちて技芸を演せむとするものの如く、其転覆を免るる能はざること言を待たざるなり。……吾人は只此の如き無限者に接せざれば、処世に於ける完全なる立脚地ある能はざること云ふのみ。而して此の如き立脚地を得たる精神の発達する条路、之を名けて精神主義と云ふ。」(「精神主義」)

III 「天命」と「人事」

(1) 「天命に安んじて人事を尽くす」という表現について

① 「人事を尽くして天命に聴(まか)す」(宋の儒者・胡演『読史管見』)

② 「明治廿五年一月十七日 第三高等中学校青年会第二周年の会に於て演述之略記」……然るに他力門の奉教者は出離の大業に於ては曩に已に他力の摂取に依托するか故に所謂天命に安んじて日常の事業に専就精励することを得るに至る」(「自力他力」明治二五年)

③ 「彼の人事を尽して天命に安んずるの事に過ぎずと雖とも我は寧ろ之を天命に安んじて人事を尽すと云はまく欲す」(『〔転迷開悟録〕』〔七〕〔明治三二年〕十月三日夜青年会談信会に於て)

④ 「彼の他力教に於て、最後の決心を絶対無限者の救済に信托し、其以下の事に於ては、吾人智能の及ぶ限りに於て災厄排避の法に従はしむるか如きは、最も恰当正確のことならずや、所謂人事を尽して天命に安んずるは、吾人の適従すへき道教にあらずや(精細に之を云へは余は天命に安んじて人事を尽すと云ふの可なるを思ふ、然れとも其は今の要点にあらざるか故に詳議せず)」(「祈祷は迷信の特徴なり」明治三三年)

(2) 他力門仏教における「天命」と「人事」

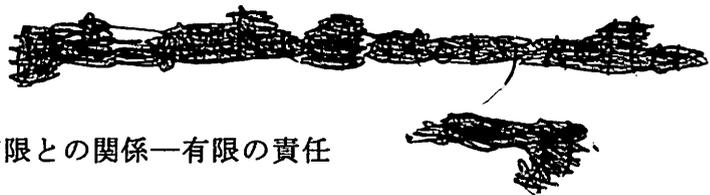
・他力門仏教の実践—「信念の確立」—自信教人信の誠を尽くす

「自己とは何ぞや」 ……「絶対無限の妙用に乗托し」…天命に安んじて
「善とは何ぞや 悪とは何ぞや」 ……「避悪就善の天意を感じ」…人事を尽くす

「自己とは何ぞや」 ……天命に安んじて 難思の弘誓は
「善とは何ぞや 悪とは何ぞや」 ……人事を尽くす 難度海を度す

「天命」とは何か。—如来の勅命。 「安んじて」とは何か。—自信。
「人事」とは何か。—「避悪就善の天意を感じ」 「尽くす」とは何か。—教人信。

「天命」とはなにか—如来の勅命—無限と有限との関係—無限の命令



「人事」とはなにか—善悪の天意—有限と有限との関係—有限の責任

「如来の自利

┆ 浄土に目覚めて 自信 —「天命に安んじて」

┆如来の利他┆

┆ 穢土に生きる 教人信—「人事を尽くす」

・清沢にとっては「天命に安んじ」ることと、「人事を尽くす」こととは「連続的循環行事」として受けとめられていた。

IV 『臘扇記』問題

(1) 『臘扇記』の地位

① 『〔明治三十五年〕当用日記』の「回想」

「回想す。明治廿七八年の養病に、人生に関する思想を一変し略ぼ自力の迷情を翻転し得たりと雖ども、人事の興廢は、尚ほ心頭を動かして止まず。乃ち廿八九年に於ける我宗門時事は終に廿九卅年に及べる教界運動を惹起せしめたり。

而して卅年末より、卅一年始に亘りて、四阿含等を誦誦し卅一年四月、教界時言の廃刊と共に此運動を一結し、自坊に投じて休養の機会を得るに至りては大に反視自省の幸を得たりと雖ども、修養の不足は尚ほ人情の煩累に対して平然たる能はざるものあり。

卅一年秋冬の交、エピクテタス氏教訓書を披展するに及びて、頗る得る所あるを覚え卅二年、東上の勧誘に応じて已來は、更に断へざる機会に接して、修養の道途に進就するを得たるを感ず。

而して今や仏陀は、更に大なる難事を示して、益々佳境に進入せしめたまふが如し。豈感謝せざるを得むや。

② 『徒然雑誌』明治三〇年八月一四日の記事

十四日(日)六、二十七/晴 蒸暑 鈴木子英語講習を始む……

阿羅漢と如来と多少の差等あり

如来とは何物何在なるや

(2) 『臘扇記』の根本課題

① 『臘扇記』と「絶対他力の大道」

「晴 如何ニ推考ヲ費スト雖トモ如何科学哲学ニ尋求スト雖トモ死後(展転生死ノ後)ノ究極ハ到底不可思議ノ関門ニ閉サ、ルモノナリ

畜ニ死後ノ究極然ルノミニアラス 生前ノ究極モ亦絶対的不可思議ノ雲霧ヲ望見スベキノミ 是レ吾人カ進退共ニ絶対不可思議ノ妙用ニ托セサルヘカラサル所以

只生前死後然ルノミナランヤ 現前ノ事物ニ就テモ其 ダス ワス Das Was デス ワルム Des Warum ニ至リテハ亦只不可思議ト云フヘキノミ

此ノ如ク四顧茫々ノ中間ニ於テ吾人ニ亦一円ノ自由境アリ 自己意念ノ範圍乃チ是ナリ Know Thyself is the Motto of Human Existence? 自己トハ何ソヤ、是レ人世ノ根本的問題ナリ

自己トハ他ナシ 絶対無限ノ妙用ニ乗托シテ任運ニ法爾ニ此境遇ニ落在セルモノ即チ是ナリ 只夫レ絶対無限ニ乗托ス 故ニ死生ノ事亦憂フルニ足ラス 死生尚且ツ憂フルニ足ラス 如何ニ況ンヤ此ヨリ而下ナル事件ニ於テオヤ 追放可ナリ 獄牢甘ンズベシ 誹謗擯斥許多ノ凌辱豈ニ意ニ介スベキモノアランヤ 否之ヲ憂フルト雖トモ之ヲ意ニ介

スト雖トモ吾人ハ之ヲ如何トモスル能ハサルナリ 我人ハ寧ロ只管絶対無限ノ吾人ニ賦
与セルモノヲ樂マンカナ

絶対吾人ニ賦与スルニ善惡ノ觀念ヲ以テシ避惡就善ノ意志ヲ以テス 所謂惡ナルモノモ亦絶対ノセシムル所ナラン 然レトモ吾人ノ自覚ハ避惡就善ノ天意ヲ感ス 是レ道德ノ源泉ナリ 吾人ハ喜ンテ此事ニ從ハン

何モノカ善ナルヤ 何モノカ惡ナルヤ 他ナシ 吾人ヲシテ絶対ヲ忘レサラシムルモノ是レ善ナリ 吾人ヲシテ絶対ニ背カシムルモノ是レ惡ナリ 而シテ絶対ハ吾人ニ満足ヲ与ヘ反対ハ吾人ニ不満足ヲ与フ 故ニ満足ヲ生スルモノハ善ナリ不満足ヲ生スルモノハ惡ナリ 満足アレハ無慾心アリ——アレハ不動心アリ 不動心アレハ胆勇アリ 胆勇アレハ無畏心アリ 無畏心アレハ精進アリ 精進アレハ克己アリ 克己アレハ忍辱アリ 忍辱アレハ不諍心アリ 不諍心アレハ (ハ) (無瞋心アリ 無瞋心アレハ) 和合心アリ 和合心アレハ社交心アリ 社交心アレハ同情心アリ 同情心アレハ慈悲心アリ 大慈悲心ハ是レ仏心ナリ

(一) 歸命心 (信仰) (二) 満足心 (三) 無慾心 (四) 不動心 (五) 不惑心 (六) 無畏心 (七) 精進心 (八) 克己心 (九) 忍辱心 (十) 不諍心 (十一) 和合心 (十二) 社交心 (十三) 同情心 (十四) 慈悲心 (十五) 仏道心

(〔十月〕二十四日『清沢満之全集』八・三六三頁)

- ・「自己トハ何ソヤ」という問いに対する応答は以下のような主題の展開をもっている。
- ・「自己とは何そや 是れ人世の根本的問題なり」
- ・「自己とは他なし 絶対無限の妙用に乗托して」
- ・「絶対吾人に賦与するに善惡の觀念を以てし避惡就善の意志を以てす」
- ・「何ものか善なるや 何ものか惡なるや 他なし」
「絶対無限の妙用に乗托」…「自己とは何ぞや」 ……「天命に安んじて」
「避惡就善の天意を感ず」…「善とは何ぞや 惡とは何ぞや」…「人事を尽くす」

(3) 如来と自己

「我信念〔我は此の如く如来を信ず(我信念)〕」

(ア) 「私は常々信念とか如来とか云ふことを口にして居ますが、其私の信念とは如何なるものであるか私の信する如来とは如何なるものであるか、今少しく之を開陳しやうと思ひます。／私の信念とは、申す迄もなく、私が如来を信ずる心の有様を申すのであるが、其に就て、信すると云ふことと、如来と云ふことと、二つの事柄があります。此の二つの事柄は丸で別々のことの様にもありますが、私にありては、そうではなくして、二つの事柄が全く一つのこととあります。私の信念とは、どんなことであるか、如来を信ずることである。私の云ふ所の如来とは、どんなものであるか、私の信する所の本体である。」

(イ) 「如来の能力は十方に亘りて、自由自在無障無礙に活動したまふ、私は此如来の威神力に寄託して、大安樂と大平穩とを得るこである。私は私の死生の大事を此如来に寄託して、少しも不安や不平を感ずることがない。「死生命あり、富貴天にあり」(〔論語])と云ふことがある。私の信する如来は、此天と命との根本本体である。」

【補足資料】

- ①「司馬牛、憂えて曰く、人は皆兄弟(けいてい)有れども、我独り亡し(なし)。子夏曰く、商これを開けり、死生、命あり、富貴、天に在り。君子敬(つつし)みて失なく、人と与(まじ)わり恭しくして礼あらば、四海の内皆兄弟たらん。君子何ぞ兄弟なきを患(うれ)えん。」(『論語』)
- ②「激勗的の語面頗る圭角あるか如しと雖とも我等か胸底の固疾を療治せんには其効能決して渺からざるものと存候 死生命あり富貴天にあり 是れえ〔びくてたす〕氏哲学の要領に有之様被思候 此は大兄へ対する東京みやげの積りに有之候」(清沢満之、稲葉昌丸宛書翰)

V 「人事を尽くす」

(1) 他力の摂取と倫理

① 「人事を尽くす」ことは「他力の摂取を仰ぎ……人世の正道を踐行せんことを勤むる」ことである。

「然るに他力門に於ては大に之〔自力門〕に異なるあり 此門に在りては安心決得の時に當りて有限無限の關係は一層顯著となり無限の範囲内に有限の存在真に明瞭となり始めて有限の有限たる所以を悟りて 一方には無限に対する宗教的の關係を了し 一方には他の有限に対する倫理的の關係を知り 所謂宗教、道德の分齊を認識して 其宗教的方面に於ては他力の摂取を仰ぎ 其倫理的方面には人世の正道を踐行せんことを勤むるにあり」

(『宗教哲学骸骨』第六章安心修徳「宗教と道德」一・三四頁)

② 「他力信仰の発得」

「……吾人は吾人のみならず一切衆生か吾人と同く彼の光明の摂取中にあることを信するなり、故に吾人は一切衆生と共に彼の光明中の同朋なることを信するなり、吾人は同朋間の同情を大要義と信するなり、同情は吾人に争鬪を許さざるなり、……同情は吾人に一切の道德を教ふるなり、而して同情の根元は吾人か彼の無限光明の摂取中にあることを信するにあり、」

③ 「倫理という事は、人倫の理義と見ます。人倫の理義とは、人と人との關係の斉正したるもの」(「倫理已上の根拠」)

(2) 清沢における善惡の探究

① 清沢満之は、その絶筆「我が信念」において、みづからが善惡・責任の問題に苦しんだことを告白している。

「所謂倫〔理〕道德の教より出つる所の義務のみにても、之を実行することは、決して容易のことでない、若し真面目に之を遂行せんとせば、終に『不可能』の嘆に帰するより外なきことである、私は此の『不可能』に衝き當りて、非常なる苦みを致しました、若し此の如き『不可能』のことの為に、ドコ迄も苦まね〔ば〕ならぬなれば、私はトックに自殺でも遂げたであります、然るに、私は宗教によりて、此苦みを脱し、今に自殺の必要を感じませぬ、即ち、私は無限大悲の如来を信することによりて、今日の安樂と平穩を得て居ることあります。」

(「我は此の如く如来を信ず(我信念)」『清沢満之全集』第六卷、三三四頁。)

(3) 「我等の大迷は如来を知らざるにあり」—『明治三六年『当用日記』

① 「Act your part to-day ; To-morrow is uncertain : Never lavish heavenly thing; Ask for your want; Give what you can: If you can't get, The time is come for you. 」【〔日記扉之自誠二〕】

(今日という日にあなたの役割り果たせ、明日という日は確かではない。天のものを浪費してはならない、あなたの欲するものは求めよ、あなたのできるかぎりのものを与えよ。もし得ることが出来るときは、あなたの〔命が終わる〕時が来たのだ。)

② 「我等の大迷は如来を知らざるにあり。

如来を知れば始めて我等の分限あることを知る。

乃ち我等の如意なるものと、如意ならざるものとあるはこの分限内のものと分限外のものとあるが為也。

然るに我等は始めより何が分限内のものにして何が分限外のものたるやを知らず。此によりて苦樂の感情なるものあり。苦は分限外のものに附随するより起り、樂は分限内のものに從属するより起る。

而して、同一事に就きて苦樂の現起するは如何と云ふに如何なることも其初は樂なるもの多けれども、それが一定の度を超ゆれば苦しみを生ず。これ即ちその事が分限外に及び

たるしるし也。

加之其度なるものは個人々々に依り、人情と場合とによりて異なるは、是れ我等の分限に種々の差等あるが為なり。

我等が賦与せられたる種々の能力を適当に運用し進めば如来は我等の分限を増大ならしめ玉ふ也。是れ我等が我等の能力を精練修養せざる可からざる所以也。

如来の奴隷となれ、其他のものゝ奴隷となること勿れ。

○

我を迫害するものあり、如何せむ。……色々苦惱がありて困る。宜しく信念を発得すべき也。信念を発得せば苦惱を脱却し得べき也。脱却し得べしと云ふも得べからずと云ふも、言語に過ぎず、實際は汝自ら之を實驗せざるべからず。

○

無限大悲の如来に信憑するものは、皆共に如来の寵児にして、互に兄弟姉妹なり故に其関係は、相愛相扶の親情（如来回向の仏心即ち大慈悲心を根本源泉とす）に出づべき也。これ我等の現在に於ける仏心の活動也。然れども、尚ほ相對有限の分位にあるが故に絶対無限の相愛相扶は未だ発現する能はざる也。惟大悲回向の分限に於て、互に相愛扶するを得るのみ。而して其相愛相扶の行為は左の二則によるもの也。（求施原則）

第一則 爾の有する所は、求めに応じて之を施すべし。

第二則 爾の欠くる所は之を有する者に就て求むべし。

この原則によりて之を觀るに、我等は求施の何れに於ても交換的の心地に住するを要とせざる也。有るものは与へよ。無きものは求めよ。其有無は共に絶待無限の分配に出づるを信ぜよ。其分配の差別不同は、我等凡智の思議し能はざる所にして、亦思議するを要せざる所也。（我は何故に遲鈍にして彼は何故に伶俐なるや、我は何故に貧家に生れ、彼は何故に富家に生れたるや我は何故に醜面にして彼は何故に美貌なるや、天の配賦に対して疑難に耽けるは、その徒勞たるを知るべき也。唯一つ心得べきは、我等の所有は其實皆是れ天の所有にして、我等は一時其保管と使用とに任ぜられたるのみ。然るに若し之を我等固有のものと執せば、全く天意に背戻するものたることは是也。

然るに、此指導に対して疑難をなすものあり云く「若し求めて与へらるならば我等は何れも怠惰を好むが故に、常に求むるものゝみ多くして、勤勉するものは、漸次に減少し僅かに勤勉するものは常に勞苦して、他人の嗜欲を充たすに是れ汲々たるに至るべし、豈に不都合の極ならずや」と。

弁じて曰く／怠惰のものは卑しむべく、勤勉のものは尊むべし。自から働き得るの体軀を持して、而かも唯求めば得らるが為に、愈と怠惰するものに至つては、実に憐むべき罪惡の徒也。これ最も如来の矜哀によらざるべからざるものにして世の慈善家は、第一に救済の目的とすべきものならずや。如来の寵児たるもの決して之を擯斥せずして之を摂受せざるべからず。「假令身死諸苦毒中我行精進忍終不悔の大悲」に浴するもの、世の財物を惜みて、この者を濟度せずして可ならんや。若し之が為めに施物を惜みて、而かも自ら財産に執着するものあらば、是れ即ち如来の財物を私するものにして、其罪や世の盜賊の比にあらざるなり。警めざるべけんや。

更に疑ふて曰く「世間滔々此罪人のみなり、仏子の此間に処する其道如何」。

曰く。世間の如何なるに關せず、仏子は、仏子の道を守るべき而已、所謂二原則は、正に此道を明示せるもの也。

最後に求施の道に就て、尚ほ一言の添ゆべきものあり。無きものは求めよ、而して終に与へられざらんか、是れ如来の我に帰去來を命じ給ふ也。喜んで此命に服従すべきなり。有るものは与へよ、而して与へ尽して求むるに、終に与へられざらんか、是れ亦帰去來の命なるを知るべき也。

○

次に財物使用の段に至りて注意すべきは、総ての財物は是れ皆天品たるを忘るべからざること也……その之を消費するの寡きものは天民としての上等なるものたる也。

【(已上の四項は明治三十六年当用日記の終に記されたるもの、圈点また先生の手による)】

【拝読文(第1案)】

(グノーシス・サウトウン〔汝自身を知れ〕) Know Thyself is the Motto of Human Existence? 自己とは何ぞや。是れ人世の根本的問題なり。

自己とは他なし。絶対無限の妙用に乗托して任運に法爾に此境遇に落在せるもの即ち是なり。

只夫れ絶対無限に乗托す。故に死生の事亦憂ふるに足らず。死生尚且つ憂ふるに足らず。如何に況んや此より而下なる事件に於いておや。追放可なり。獄牢甘んずべし。誹謗擯斥許多の凌辱豈に意に介すべきものあらんや。否之を憂ふると雖ども之を意に介すと雖ども吾人は之を如何ともする能はざるなり。我人は寧ろ只管絶対無限の吾人に賦与せるものを樂まんかな。

絶対吾人に賦与するに善惡の觀念を以てし避惡就善の意志を以てす。(自覚の内容なり—(此自覚なきものは吾人の与にあらざるなり)) 所謂惡なるものも亦絶対のせしむる所ならん。然れども吾人の自覚は避惡就善の天意を感ず。是れ道德の源泉なり。吾人は喜んで此事に従はん。

何ものか善なるや。何ものか惡なるや。他なし。吾人をして絶対を忘れざらしむるものは善なり。吾人をして絶対に背かしむるものは惡なり。

(『臘扇記』『全集』八・三六三～四頁)

【拝読文(第2案)】

之(これ)を我(われ)一身の行為に就きて云はば、彼(か)の「人事を尽くして天命に安んずる」の事に過ぎずと雖ども、我(われ)は寧(むし)ろ之(これ)を「天命に安んじて人事を尽くす」と云わたく欲(ほつ)す。其の故は天命に安んずるは勿論、人事を尽くす迄が、皆天与の恩賜(おんし)なれば、先づ天命に安んずるにあらざれば人事を悉(つく)すこと能(あた)はざればなり。

(『転迷開悟録』「〔七〕十月三日夜青年会談信会に於て」『全集』二・一六一頁)

(このことを私一人の自身の行為について言うならば「人事を尽くして天命に安んじる」ということに過ぎないのですが、私はむしろ「天命に安んじて人事を尽くす」と言いたいと思います。その理由は、天命に安んじることはもちろんですが、人事を尽くすということまでもすべて天が与えてくれる恩恵であり、まず天命に安んじるのでなければ、どのような人事もなしとげることはできないからです。)